

第Ⅵ章 復 原 模 型

平城宮復原
全 域 模 型

平城宮跡の発掘調査は昭和34年以降継続的に行われていたが、当時は通称一条通り以北と、第2次内裏の一部についてのみの発掘調査が行われていた程度で宮跡の大半は水田地帯であり、宮の遺構についてはほとんど未知の域を脱していなかった。したがって、この広い宮域には奈良時代盛時には多くの宮殿官衙が存在することを視覚的・面的から理解することによって、宮域保存の意義を一般の人々に周知せしむべく、文化財保護委員会は奈良国立文化財研究所に全域模型の製作を依頼した。

平城宮の官衙地区については陽明文庫所伝の宮城図や裏松固禪の復原した大内裡図を参考にして敷地割を想定し、官衙建物の配置については、それまでの発掘によって知り得た建物配置に準拠するなど、模型製作に当ってはかなり大胆な想像をまじえて復原している。そのため、その後の発掘の進展によって東院張り出し部の拡張のように多少の修正を余儀なくされた部分もあるが、平城宮の概略を理解するための一助となっている。

この模型の縮尺として600分の1を採用した理由は、江戸時代からの地籍図が伝統的に600分の1であること、宮周辺を多少加えると模型本体が2m四方となり、展示にも運搬にも適当な大きさであることなどによる。

建 物 復 原
1/10 模 型

これに次いで計画されたのが、発掘によってあきらかとなった主要な建物につき、建物個々の実物に即した詳細かつ精巧な復原模型の製作で、縮尺としてその目的を満足さすに足る10分の1が選ばれた。製作に先立ち調査部内での討議をもとに原案を設計し、のち平城宮跡発掘指導委員会、特に浅野清氏をはじめとする建築史関係委員の指導と助言のもとに幾度か修正案を作り、実施設計の作業を進めた。

製 作 基
本 方 針

製作に当たっての基本方針として、部材寸法は勿論のこと、継手・仕口なども忠実に古代の技法の再現につとめること、隅木や茅負などの曲り材や、金具・風鐸・鶏尾など彫刻を伴う場合は、あらかじめ現寸形板あるいは現寸原形を作って検討を加えること、材料は原材料を原則とするが、基壇石・土壁・屋根瓦などは、予算および製作技術の上からやむを得ず木製で彩色仕上げとすること、などをきめた。

これら10分の1模型は、昭和40年以降現在まで朱雀門や内裏正殿一郭など5件14棟におよぶ¹⁾。今回はこれらのうち本報告の発掘区と直接関係のある朱雀門と西面門（南門と中央門）の2棟について、遺構から得られた直接資料と、推定部分のよりどころとした諸点についてのべる。

1) 既製作10分の1復原模型内訳

模型名称	建物種別	製作年度
朱雀門復原模型	朱雀門	昭和40年度
内裏正殿一郭復原模型	内裏正殿	〃
	内裏回廊(単廊)	〃
	内裏回廊(複廊)	昭和41年度
	内裏東第一・第二殿	〃
	内裏築地回廊(南辺部)	〃
西面南門復原模型	西面南門	昭和42年度

模型名称	建物種別	製作年度
塙積基壇建物一郭復原模型	塙積基壇建物	昭和43年度
	高床建物	昭和45年度
	築地片廂廊	〃
	目隠堀(東および南)	〃
朝集殿復原模型	朝集殿	昭和44年度

なお、模型の製作は文化庁（昭和43年以前は文化財保護委員会）の予算で執行し、完成後順次当研究所に管理替えをおこなっている。

1 朱雀門 (PL.64)

前節と重複するきらいはあるが、朱雀門の復原資料として遺構から直接得られた点を列記す **復原資料**
れば次のとおりである。

- 1 建物の規模は、桁行5間・梁間2間であること。
- 2 柱間は各間とも17天平尺（以下同じ）であること。
- 3 柱位置の根石の存在からみて、柱は礎石建ちであること。
- 4 掘込地業の範囲は側柱列から約12尺出た位置からはじまり、これがほぼ基壇の出とみられること。
- 5 屋根は瓦葺きであること。

また、門の左右に続く築地大垣については、

- 1 基底部の幅は、門中心から左右にそれぞれ84尺までは12尺と広く、それ以遠は9尺に減じていること。
- 2 門の両側に築地大垣を切った形で脇門を設けていること。
- 3 この脇門は本柱が掘立柱で、その柱間は14.5尺あり、朱雀門中心から脇門中心までの距離は98尺あること。

以上の諸点を基礎にして、これに現存する同時代の建物や、発掘の類例、あるいは平安宮を **参考資料**
画く絵巻物などの文献資料等を加え、各部につき、次のように復原した。

A 門の形式

平面については、遺構から明確な解答が得られたからあまり問題はない。ただ、基壇にともなう階段位置およびその幅が確認されていないので、戸口の数が不明である。ここでは常識的に当然こうであろうと思われる棟通り中央三間を扉に、その両脇間および両側面各2間を土壁と考えた。したがって階段は戸口幅3間分につくこととした。

一方、立面は遺跡からの復原という性格上推定にたよらざるを得ないところが多い。しかし階層や屋根形式などの基本的な形式については、この門が平城宮の正門であるという事実から推して宮城門の中でも第一級の構えをもっていたのは当然で、重層にして屋根を入母屋造とみ **構造形式**
てまずまちがいない。このことは絵巻物での平安宮の例からも、また当基壇の築成が周囲地表から1.5mも掘込まれ、いたって入念強固に施工されていることからもうかがえる。

B 柱

柱の太さ、長さは全体の意匠を考える上でかなりの影響をもつ。ここではほぼ似た年代の建物である法隆寺中門と東大寺転害門などを参考にし、柱径は転害門よりやや太い2.5尺。長さは柱間と同寸の17尺と定めた。現存する古代建築で柱間と柱長さが近似するものは唐招提寺金 **類例建物**
堂その他数例みられるが、ここでは平面寸法の規準が立上りにも生かされたのではなかろうかと推定にもとづく。柱には多少の胴張りがあると考え、上方で各面0.15尺の落ちをつけ、柱頂

には奈良時代の通例である面をとった。また隅柱および次の柱には軒反りをとりやすくするために隅延びをつけた。

建物を重層とする場合上下層のバランスがもっともむづかしい。これには斗拱や軒の高さと出、屋根の勾配などが複雑にからまりあってくるから、全体のプロポーションをみながらの設計になり、ただ単に上層の柱寸法だけでは決定できない面がある。この復原でも成果を得るまでもっとも時間がかかったのがこの点であるが、その結果だけを示せば上層の柱間寸法を桁行・梁間とも下層より7.0尺短かい78.0尺・27.0尺にとり、桁行は15.0尺16.0尺15尺の5間に、梁間は13.5尺2間にそれぞれ割振った。また柱の太さは下層同様少し胴張りをつけた。

上層柱
間寸法

C 斗 拱

前述のごとくこの門が第一級の建築として様相を呈していたとすると、斗拱は当然三斗先とみてさしつかえない。建設年代が瓦その他から平城宮造営の最初期である和銅とみられるから現存遺構では薬師寺三重塔が最も近い類例となる。ただし部材寸法は薬師寺では全体にやや小さすぎ（例えば初重柱径1.75尺、大斗幅1.7尺同高1.14尺）この点では柱径のほぼ相似た東大寺転害門がより参考となろう。一方丸桁の位置、すなわち斗拱の前方への出に関しては、軒全体の出と相関関係にあり斗拱単独ではきめ難い。ここでは後述のとおり軒の出を下層17.00尺、上層16.00尺にきめたから薬師寺三重塔の比例にしたがって側柱心から丸桁心までを下層8.00尺、上層は7.40尺にとった。この結果上下層の肘木の長さはそれぞれの位置によって異なってくる。ただし部材寸法は階層による差はつくらず、肘木を1.0尺×0.9尺、巻斗を1.30尺×1.30尺×0.9尺とするなど原則的に同一寸法とし規格性をもたせた（大斗のみは直下の柱径が違うところから幅・成とも0.1尺落しとした）。

部材規格
の性

D 軒

軒の出は柱長さ同様建物の造形上重要な要素をもつ。ここでは試作図を種々作成し検討を加えた結果、全体的にもっとも釣り合いがとれたと感じられる値、下層17.00尺、上層16.00尺を採用した。これは丁度各層の基本柱間に相当する。地軒と飛檐軒との割合は下層の飛檐軒を2.50尺と押さえ残りを地軒とした。この結果、地軒は6.5尺になり全体9.0尺に対し7割2分で遺存例からみても矛盾しない。上層は同じ比率を軒の出にかけあわせて決定した。

垂木の勾配は、地垂木を斗拱の復原によって得られた尾垂木勾配10分の4.5よりやや緩い10分の4.2とし飛檐垂木をこれより10分の1.0落した10分の3.2とした。垂木の断面は奈良時代の通例にしたがって地円飛角にし、地垂木は反りを持たない棒垂木、飛檐垂木は下端を先端で少しそぎあげる形とした。なお垂木割りは、柱間寸法が整数値よりなっているところから、側柱心を手狭さむ1.0尺で割りつけた。

軒反りについてはまったく確証はない。現存遺構でみても軒まわりは後世の改変になる場合が多く当初部材を残すものとしてわずかに雛形としての海竜王寺五重小塔その他数例をあげ得るにすぎない。したがって多分に感覚的にならざるを得ないが、ここでは柱の延びによって生じた桁反りを基礎に、下層の茅負留先で1.20尺の反りをつけ、さらに中央部での視覚的な起りを矯正するため施工に際し振分心位置でわずかに押え込んだ。

E 屋 根

一般に奈良時代の瓦葺きは、化粧垂木の上に小舞を敷きならべ、その上から直接葺土を置いて葺き上げるものとされている。したがって垂木の様相がそのまま屋根面にあらわれる傾向が強く、例えば軒における飛檐垂木と地垂木の接点部、上層屋根の下方垂木と上方垂木との接点部などは、どうしても折線によってなるくぼみが生ずる。

これを補正する方法としては、普通葺土の厚さを加減することによっておこなわれる。しかしこれにはおのずから限度があって、上層屋根の上下垂木の勾配差の大きい場合のように葺土での限界を越えるときは、法隆寺金堂にみられる鯉形の垂木を挿入するなどしてかさ上げをするのも一方法である。この模型では便宜上、下方垂木の最頂部に母屋を転ばせ、これに上方垂木をのせ、先端を下方垂木になじみのよいところまで延ばし、このくぼみを埋めることにした。この結果前後流れについては解決したものの、隅位置で妻側の屋根面とに落差が生ずることになった。隅降り棟を真隅におさめようとするといきおい妻側の屋根面、特に又首台位置では軒反り以上の反り上がりが必要とする。だから妻飾りの三角形は、野屋根によって葺き上げる後世のものとは多分におもむきの異ったものとなった。

屋 根 面
の 処 理

瓦葺き立てに際しての詳細は不明な点が少なくない。最初にのべたようにこの模型の瓦は木製造り出しとしたため勿論実際どうりにはっていないが、一応基準とした点をあげれば

瓦葺の規準

- 1 軒平瓦は茅負に直接瓦繰りをつけてのせる古法とした。
- 2 瓦の形式を藤原宮式とみたため軒先における瓦割りは1.0尺とした垂木割りよりやや広くなって両者の割りにはずれが生じる。
- 3 平瓦の葺足は0.5尺とみた。
- 4 妻の掛瓦も軒同様の割付けとし、利根丸を一本通り流して、二・三本目の丸瓦に降り棟をのせた。
- 5 降り棟は、平・隅とも稚児棟はつけない。
- 6 大棟端飾りは瓦製の鴟尾があがっていたものとみて、その形式は鳥坂寺その他同時代のものを参考にして製作した。

このうち4については、法隆寺玉虫厨子のように利根瓦をやめて、一、二本目の丸瓦に直接降り棟をのせる方法も考えられる。この場合軒丸瓦の尻を長くする必要があるが、鴟尾と降り棟とのとり合いはの方がむしろうまくおさまる。

F 雑 作 等

扉口 中央に開く三戸の扉は内開きの板扉であったと考えられる。奈良時代の板扉の遺存例は少ないが、扉の大きさからみて、例えば唐招提寺金堂のような、縦板寄せ木張り裏棧形式とみるのがもっとも妥当であろう。そしてたぶん表側には裏棧留めの釘隠し金具や、軸元の八双金具などで麗々しく飾り、裏側には戸締りのための門がついていたであろう。扉構えは刃付・方立・鼠走り・楣、からなる古式なものとし、扉の下軸は唐居敷を置きこれでうけていたとみた。唐居敷の材質は平城京羅城門のように²⁾、石製であったかもしれないが、ここでは木製とみなした。

上層柱間装置 正面5間の内、中央3間を連子窓、正面端の間と側面とを土壁として設計した。連子窓としたところは板扉とも考えられるし、また板扉と連子窓の併用であった可能性もある³⁾。

上層高欄 重層門の場合高欄は欠くことができない。先に上層の柱高さを決定したがこれにみあう位置に架木をもってくると、高欄地覆下と屋根面との間に空隙が生じ、ここを埋める意味もあって三ツ斗、人形割束の腰組付の高欄にした。高欄各材の形式は、架木を八角断面、斗束を撥形、平桁・地覆間を横連子にするなど、海竜王寺五重小塔や正倉院蔵紫檀塔残欠などを参考にしてみえた。

G 基 壇 外 装

基壇土が入念な版築によって積上げられていることはすでにのべた。この仕事からみてもまた建物の格からいっても基壇の外装はもっとも本格的とされる 壇 正 積 みであったとみなされる。遺跡での凝灰岩片の散布もこれを裏付ける。基壇の高さは東大寺南大門などを参考にし、布石上端から葛石上端までを成0.9の階段石5段分4.5尺にとった。この高さは現存根石の上に礎石がのるものとして矛盾しない。基壇上面は歩行上のことを考慮して全面凝灰岩切石敷きとしたが、根拠は薄い⁴⁾。

東 石 基壇での一つの問題は東石の存在である。実施案では大安寺南大門・中門などの発掘例から、四隅と各柱通りに入っていたものとしたが、その後の薬師寺金堂や同寺西塔の発掘によって平城遷都直後にはまだ東石のない、いわば古い形に属する基壇が築成されていた事実が判明した。したがって、朱雀門の場合も東石がなかった可能性も考えられる。今後の発掘例に期待したい。

H 築 地 大 垣

平城宮での築地の問題はさきに『平城宮報告Ⅲ』でとりあげ考察を加えている。そこでは延喜式の記載例をひき、築地の高さはその基底幅と密接な関係があることをのべた。

築地基底幅 このことから宮の外周をめぐる基底幅9尺の築地が門際でのみ12尺に広がるという事実は、門際だけ、ほかよりも1段高く構えていたことが推察され、そうすることによって、宮の正門である朱雀門への中心性をより高めるという効果をねらったものと考えた。ただし、それぞれの築地の絶対高さについては今一つ明確さを欠く。この復原では方法的にはやや逆の感はあるが、先ず門本体に直接とりつく築地大棟の高さを門の柱天ときめ、以下順に反り上り分を引いて12尺幅部分の基準高さを、そしてそれをもとにして9尺幅部分の高さをきめていった。

西側にとりつく脇門については遺構そのものから、位置・大きさ・柱径まで読みとることができるので問題は少ない。朱雀門に準じて、扉構えおよび扉の形式などをととのえた。

2) 昭和10年に羅城門跡である現佐保川川床より発見されたもの、「平城京羅城門跡発掘調査報告書 1972」参照。

3) 伴大納言絵詞に画く平安宮朱雀門は、正面7

間の内、中央間を土壁、その両脇各2間を板扉、端の間を連子窓としている。

4) 平城宮第2次内裏築地回廊閣門では門の内側のみ門幅3間分を凝灰岩敷きとしていた。

2 西面門 (南門および中央門 PL.65)

前節でのべたとおり15次の発掘で南門を、25次発掘で中央門を、遺存する基壇の掘込み地業によってそれぞれ確認している。

この掘込み地業の範囲から基壇の大きさを復原し、さらに柱位置を想定すれば、桁行は5間で17尺等間、梁行は2間で15尺等間とした場合に丁度合致する。ただし、この場合の前提条件として切妻造単層門であること、斗拱は平三ツ斗程度のものであること、の二つを考慮した上でのことである。

復原
間
柱
法

幸いなことに同程度の門として東大寺転害門が残る。桁行柱間が5間と3間の差はあるものの柱間寸法も相似ており、今回の復原では構造形式、部材寸法とも転害門によったところが多い。おもな点を列挙すれば、

構造形式

- 1 柱径2.4尺、柱長さ17.0尺とほぼそのままとった。
- 2 斗拱は現在の転害門を当初の形に復原した実時木付き平三ツ斗とした。
- 3 梁架構は大梁を側柱通り、棟通りとも大斗と組合わせて受ける形式とし、妻飾りは二重虹梁蓋股式、内部は三ツ棟造りとした。
- 4 軒垂木は地円・飛角とし茅負までの出を9尺にとった。
- 5 木棟端は鬼瓦とした⁵⁾。

なお築地の全幅は発掘区の関係で確認できなかったが、朱雀門のように広狭があるようには認められなかったので基底部9尺のまま門に取付くものとみた。脇門の位置は朱雀門による。

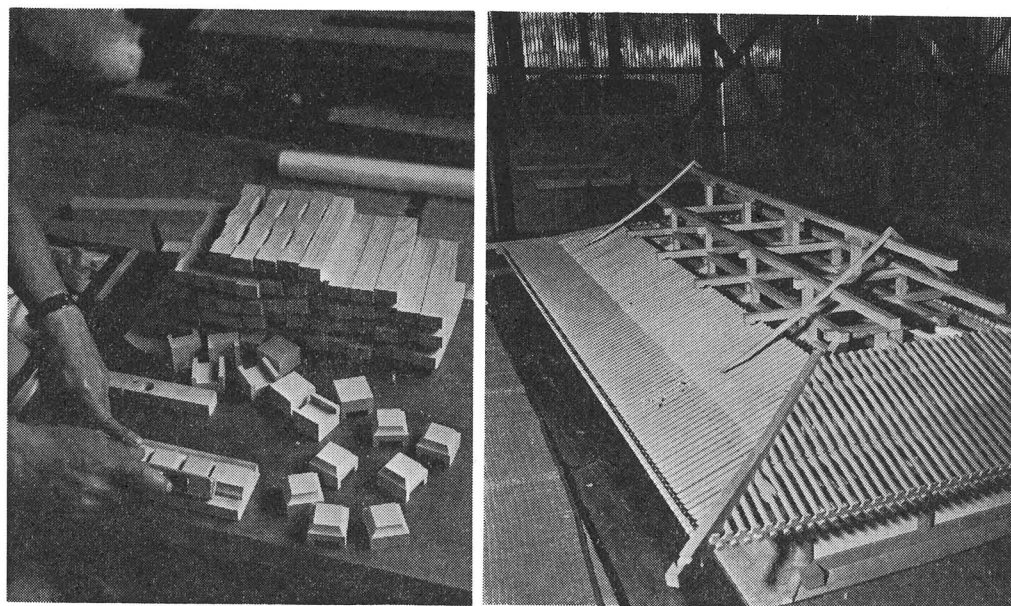


Fig. 33 模型木作り

5) 平安宮東面門を画く年中行事絵巻および信貴山縁起絵巻では大棟はともに鴟尾(瓦製か)を画いている。平城宮の場合も鴟尾であった可能性もあるが、宮内から未だ鴟尾の断片すら発見されていないことから今回の復原模型では一応鬼瓦と考えた。

性もあるが、宮内から未だ鴟尾の断片すら発見されていないことから今回の復原模型では一応鬼瓦と考えた。